

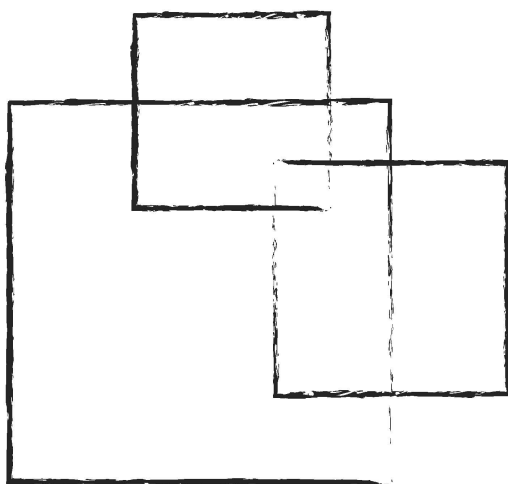
横 耕 溝 談 俱 楽 部



花の中の女：袴 白沙
百日紅の客人：六島 京
悪魔の人形師：築地つぐみ

金田一耕助 ^{パステル} デシユ 特大号

横 耕 溝 談 俱 楽 部



神保町横溝倶楽部

楽 溝 倶 楽 部

横溝耕談倶楽部 目次

表紙モデル……………遠藤里那
表紙撮影……………内田名人

怪盗
跋扈

悪魔の人形師

…築地つぐみ
画…鐘宮ヤマト (4)

探偵
懊惱

告 解

…みかん畑 (23)

真相
逆転

吊り鐘はなぜ歩く

…tokyo-zodiac
画…深海コヨーテ (26)

悦楽
愉快

おかしやき劇場
横溝回文

…おかしやき (57)

神 保 町 横

悲恋
幻視

クライムイン・Y

…無名氏
画…genzen

(58)

本格
贋作

花の中の女

…裱白沙
画…ボン酢

(64)

真備
再臨

百日紅の客人

…六島京
画…文月ゆた

(88)

著者紹介

………

(103)

奥付

………

(104)

悪魔の
人形師

築地つぐみ
画 鐘宮ヤマト



新米探偵の憂鬱

あの探偵が羨ましい、と金田一耕助は探偵事務所の椅子に座りながら天井を眺めて思いました。

その頃金田一耕助はアメリカの留学から帰ってきて東京に探偵事務所を開いて間もありませんでした。事務所を開いたものの、名前が売れているわけでもない新米探偵である金田一探偵に事件の依頼が来るはずもなく、毎日事務所の中でひねもすのんびりと過ごしていました。

金田一耕助の言うところのあの探偵、とは、この東京に跋扈する怪盗、怪人二十面相と大捕物を演じてみせている明智小五郎のことでした。新聞には明智探偵の名前が踊ることが多く、難事件の依頼も明智に集まって、それらの難事件を次々と解決してはまた新聞に載って名声は高まる一方でした。

金田一耕助としても、自分の生活している東京で二十面相が活発に動き回っていることは知っていましたから、ここは一つ、自分も二十面相の事件を解決させて名聲を得ようではないか、と思うのですが、何しろ警察に伝手がありません。一つ二つ、大きめの事件を解決して新聞に載ったことも

ありますが、こと二十面相の関与する事件に関しては、金田一耕助は一般人の如く新聞で情報を得ることはできずに明智探偵の後塵を拝するばかりで、ただただ活躍をうらやむことしかできないのでした。

いつものように皺だらけの着物に袴姿の金田一耕助は、事務所で一人、新聞を読んだり探偵小説を読んだりして過ごしていましたが、その日は珍しく扉をノックする人がありました。

「金田一さん、電報です」

なあんだ、依頼人ではなかったか、とノックを聞いたときに胸が多少なりとも高鳴った自分を少し恥じながら、金田一耕助は事務所の扉を開きました。そして郵便配達員から電報を受け取りました。

「わざわざ電報とは誰からかしらん」

ひとりごちながら電報に目を落とすと、みるみるうちに金田一耕助の眼光は鋭くなり、しまいにはぼさぼさにしている髪の毛の中に指を突っ込んで、がしがしと掻きむしり始めるのでした。

「いやいや、こうしてはおれないぞ。急いで大阪に行かなければ」

ぶつぶつとそんなことを言いながら、金田一耕助は旅に出る身支度を始めるのでした。

電報には、「久保氏ヨリ紹介受ケル 至急大阪ニ来レ 岩瀬庄兵衛」と書かれていたのでした。

久保氏というのは、金田一耕助がアメリカに留学しているときにお世話になった久保銀造という人で、この事務所を開くときに開設資金として五千元という大金をポンと出してくれた、金田一耕助にとっては大恩人なのです。

その久保さんに紹介されたといつて電報をよくよこした、岩瀬庄兵衛という人もまた、日本に知らぬ人はいないという大阪の大富豪なのでした。宝石商である岩瀬さんが何よりも有名になったのは、数年前に起きた『黒蜥蜴』事件で岩瀬さんが持っている「エジプトの星」という宝石を狙われたことからでしょう。読者諸君の中にも、『黒蜥蜴』事件のことを覚えていいる人はいるのではないでしょうか。

そんな大富豪の岩瀬さんからの事件の依頼です。何より、岩瀬さんは一度あの明智探偵に事件を解決してもらっているのです。新聞でも報道されましたから、金田一耕助ももちろんそのことを知っています。それでも今回、事件の依頼をして来たわけですから、金田一探偵の胸が躍らないはずはなかったのです。

（やあ、この事件を解決したならば、僕の評判もさ

すがに高まらないではいられないぞ」
 そんなことを考えながら、金田一耕助は大阪行き
 の準備をしていました。

暗闇の人形

その頃、大阪の町という町ではそいつの噂でもち
 きりでした。

そいつは暗闇でしか姿を現さず、すぐに姿を消し
 てしまうので、はつきりとした姿を見た人は全くだ
 ないのです。

住宅が並ぶ町の中を通る暗い道を、仕事帰りの左
 官屋の小父さんが家に向かっていきますと、遠く前の
 方に人影が見えました。帰る途中の屋台でお酒を飲
 んで、酔っぱらっていたこともあって小父さんは初
 め、勘違いかと思っていたのですが、どうやらそう
 ではありません。その人影は近づくに連れて、着物
 姿の女性であることがわかりました。髪を綺麗に結
 っているのです、きつとお金持ちの奥さんなのでしょ
 うか。それが俯いて肩を揺らしているのです、どうや
 ら泣いているようです。

結婚した先で、嫌な目にでも遭ったのだろうか、

と考えた小父さんは放っておくのも物騒ですから
 声をかけようと近づきました。しかし、思ったより
 もその女性の身体が小さいことに近づいてみて気
 づきました。

「ああ、もしもし。どうかしましたか」

変だな、と思いながらも、小父さんはその女性に
 声をかけました。その小柄な女性は何も言わずに肩
 を揺らせるのを止めて、ゆっくりと顔を上げました。
 その顔は目が血走っていて耳まで口が割れた、お化
 けのような顔だったのです。

突然のことで小父さんは声を上げてその場にへ
 たりこんでしまいました。するとその女性は暗闇の
 中へと姿を消してしまいました。

冷静になつて考えてみると、その女性は、文楽の
 人形で仕掛けを操作すると美人の女性の顔が鬼の
 ように変わる「がぶ」という頭の顔とそっくりであ
 ったことを小父さんは気づきました。そしてその女
 性の回りに黒ずくめの人間が数人いたような気も
 します。

このような、街角に人形が立っていて人をびっく
 りさせるといった出来事が大阪の暗い街角のそこ
 ことで頻発して、誰からともなくその人形を操って
 いる人のことを「悪魔の人形師」と呼ぶようになって

ていました。

その「悪魔の人形師」から、大阪の大宝石商岩瀬庄兵衛さんに、予告状が届いたのでした。

予告状には、「貴殿がお持ちの宝物を近日中に頂戴いたします。また追ってご連絡いたしますので、せいぜいご用心なさってくださいまし」と書かれ、宛名は岩瀬庄兵衛、差出人には「悪魔の人形師」の署名が丁寧にもなされてあったのです。

ポストに、他の郵便物にまぎれて入っていたその予告状を目にした岩瀬さんは、見るなり顔が真っ青になってしまいました。何せ、数年前にかの有名な大盗賊「黒蜥蜴」に、岩瀬さんが持っている「エジプトの星」を狙われて大変な目に遭ったところですから。「エジプトの星」は、岩瀬さんが持っているものの、価値は国宝級の、この国で最大最貴のダイヤモンドで南阿産、ブリリアント型、三十数カラットの宝玉なのです。嘗てはエジプト王族の宝庫に収まっていたものなのですが、先の大戦の折に流出し、巡り巡って岩瀬商店巴里支店の買収するところとなり、今は本店のある大阪に鎮座しているのです。

「黒蜥蜴」事件の詳細は別に置くとして、大盗賊黒蜥蜴の魔手より宝玉を守り抜いたのは誰でもない名探偵明智小五郎なのでした。

です。岩瀬さんは今回も、明智探偵に事件の解決を依頼しようと思いい探偵事務所へ急いで電話をかけました。電話にはお留守番をしている小林少年が出たのですが、あいにく明智探偵は北京へ出張中で日本にいない、と言われたのでした。急いで明智探偵に連絡をしてみる、と小林少年は言ってくれましたが、明智探偵の出張は国家機密に関わっていることらしく、いつ帰ってくるのかわからないそうです。

もちろん警察に相談もするつもりではありましたが、黒蜥蜴のときのこともありますから、傑出した大盗賊ならば盗み出されかねません。近頃大阪の騒動を岩瀬さんも知らないわけではないですから、心細いことこの上ありません。それに加えて頼みの綱の明智探偵が日本にいないとなると、岩瀬さんの不安はいや増す一方でした。

そんな折、関西の財界の集まりで名刺をかわした、岡山の果樹園王、久保銀造さんのことを岩瀬さんは思い出したのでした。そのときには黒蜥蜴事件は全部解決した後でしたから、会う人に「大変でしたね」と声をかけられるのが常でした。久保さんも他の人たちと同じように「大変でしたね」と岩瀬さんに声をかけてくれたのですが、それに加えて、自分の知

り合いにもまだ無名ではあるけれど明智探偵に負けず劣らず優れた頭脳を持つ名探偵がいると言っていたことを思い出したのです。その名探偵の名前は、金田一耕助というのですが、昨年のある「銀座某重大事件」を解決に導いて新聞記事になった際にその名前を見かけたことは岩瀬さんの記憶にも新しいものでした。明智探偵が海外に出ているのなら仕方がない、久保氏に紹介を頼んで金田一探偵に事件を未然に防いでもらうよう依頼をすることに決めたのでした。

少年探偵の追跡

岩瀬さんより「悪魔の人形師」の予告状の相談を受け、明智探偵に浪越警部からあらましを伝えてもらうようお願いはしたものの、小林少年は何やら胸騒ぎがしてなりませんでした。

小林君は、明智探偵が戻ってくる前に先んじて大阪に一人で向かうことにしました。少年探偵団の団員は皆、昼間はそれぞれ学校に通っていますから、長い期間、大阪に滞在することができなかつたのです。小林少年は明智夫人である文代さんをお願いし、

一人で大阪に向かうことを許してもらったのでした。

「悪魔の人形師」の狼藉は、東京にはまだ届いてきてはいませんが、岩瀬さんの話を聞くと、これは一筋縄でいかない相手であるように小林君には思えたのです。

岩瀬さんに折り返し、遙か中国にいる明智探偵に事件のことを伝えた旨を連絡すると、岩瀬さんは急を要するので、明智探偵とは別の金田一耕助なる人物に事件の解決を依頼したと小林君は聞きました。金田一耕助という人物の名前はどこかで聞いたような覚えもありましたが、なんだかよく分からない探偵がしゃしゃり出てくるとだいたいよくないことが起こることも小林君は知っていました。

これは個人的に調査するしかあるまいぞ、と小林少年は一人、大阪行きの特急列車に揺られて強く決意するのでした。

黒蜥蜴事件のときには小林君は事件の捜査には関わっていませんでした。事件のあらましを明智探偵に尋ねてみても、明智探偵はどこかものうげな表情を浮かべて言葉少なになるばかりでしたので、いつしか小林少年も尋ねないようになってしまい、あまり詳しいことを知らされていないのでした。です

ので小林君が大阪の地にやってくるのは今回が初めてなのです。

東京を朝方に出て、小林君が大阪に着いたときには夕方になっていました。夕日が差し込むホームに降り立つと、喧しく飛び交う関西弁に、ああ、大阪にやってきたな、と改めて感じ入るのでした。

とりあえず今日泊まる予定のNホテルに向かう、と大きな荷物を抱えてホームできよろきよろとしていた小林少年は、ホームの端に自分よりも大きな荷物を抱えた怪しげな老人がいることに気がついたのでした。

その老人は風呂敷で覆った大きな荷物を背中に背負い、ぼさぼさの白髪頭は乱れたまま、白髪まじりの髭も伸び放題にしている、身には襦袢のようになった衣服をまとっています。黒い色眼鏡をかけていますから表情までは見えません。履いている靴もくたくたで穴があいているようです。

ホームの柱の影からその老人の様子をうかがっている、よたよたと危なっかしい足取りで大きな荷物をえっちらおっちら運んでいます。よろっとバランスを崩した拍子に風呂敷包みがほどけて、中に着物姿の少女が入っているのが見えました。

(ややつ、女の子を背負っているのかしらん)

慌てて懐から

少年探偵団の

七つ道具で

ある万年

筆型の望

遠鏡を取

り出して、

風呂敷を

包み直して

いる様子を

見てみると、

包みの中にい

たのは着物姿で

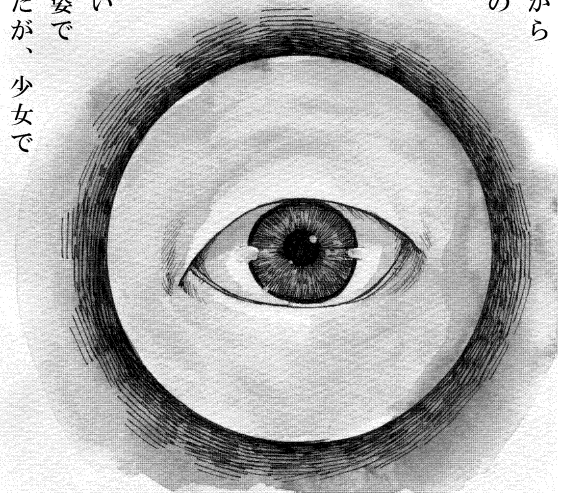
はありましたが、少女で

はなく人形であることが分かりました。生きている人間でないことがわかってほっと一安心しました

が、その人形が文楽人形であることに気づいて小林君はハツとしました。

ここ最近大阪を騒がしているという「悪魔の人形師」は、岩瀬さんの話を聞くと文楽人形を使って人を驚かしているようです。そしてその文楽人形を持った不審な老人が目の前を歩いていきます。

(これは何かあるやも知れないぞ)



難事件を解決した後、金田一耕助には虚無的になる時期がある。

その日もちょうど、そんな時だったのかもしれない。

告解

いかにも彼好みの、流しもやって来ないような通りの外れの小さなバアであった。彼は背を丸め、小さなグラスを両手で抱え込むようにしながら、凝つとその琥珀の水面を眺めている。

元々強い質でもないのだが、その日はもう酔うて

でもいたのだろうか、そんなことを言い出したのは。

「ぼくはね、ろくでなしなんですよ」

彼は、自分を語ることをほとんどしない。名声が高まるにつれ、華々しく彼を飾り立てる賞賛の言葉

……みかん畑

の真中に据えられても、彼はいつも、少し困つたような微笑を浮かべるのみである。

それは、彼の謙遜と一種照れ隠しだとわたしも考えていた。

しかし。

吊り鐘はなぜ歩く

作: Tokyo-Zodiac
画: 深海ジョーテ

長くつらかった夜光怪
人の事件もようやく幕を閉
じた。奴に何度も煮え湯を飲ま



された私（三津木俊助）は、ようやく重い腰をあげてくれた由利麟太郎先生に感謝するとともに、引退を理由に出馬を拒んだ先生を熱心に口説いてくれた御子柴（みこしば）進君にも感謝しなければならぬ。

竜神島を離れるに当たり、迎えの船に乗った私と由利先生、御子柴君、そして夜光怪人との孤独な闘いに身を投じていたヒロイン一柳（ひとつやなぎ）藤子君。そこへ今回の捕物で、船の手配や漁師たちを組織してくれた獄門島の網元・鬼頭儀兵衛さんが声をかけてくる。

「由利先生、ありがとうございます。儂らを悩ませてくれていた海賊どもまで一網打尽にしていたいただき感謝に絶えません。これで今日から島民全員、枕を高くして眠れるというもんです。」

獄門島の近海では近頃、オリオン組と名乗る海賊団が、無人だった竜神島を根城に漁師たちを脅かし、笠岡の警察署も対応に苦慮していたが、この島に眠る財宝を狙う夜光怪人の一味と衝突したことで、一気に問題が解決されたのだった。

「いえいえ、礼を言うのはこちらです。本当に助かりました。」

「ところで由利先生に三津木さん。もしよろしけれ

ば、暫く獄門島で骨休めをされて行かれては？何も無い島ですが、海の幸だけは豊富ですからな。」

「おお、それはありがたい。でも三津木君はすぐ東京に戻って、今度の事件の記事を書かなければならないか・・・」

「いえ先生。実は編集長の計らいで、後から来る神戸の支局の者に記事を渡せばいいだけの手はずになっていました。」

一度ならず二度までも夜光怪人に出し抜かれ、すっかり面目を失った私のことを氣遣ってか、「事件が片付いたら、向こうで美味しいモンでも食って、少しぐらい羽根を伸ばして来い」と編集長に送り出されて来たのだった。今度ぐらいその好意に甘えても罰は当たるまい。

すっかり話はまとまり、私たち四人は儀兵衛さんの分鬼頭家に二、三日逗留することとなった。獄門島に向かう中儀兵衛さんが、

「時に由利先生、三年前にうちの島で起きた事件のことをご存知ですか？」

「ええ、もちろんです。東京の新聞にも報道されましたが、なかなかの難事件だったそうで。実はこちらに来る前、協力要請を兼ねて岡山県警の本部長に挨拶に伺いましてね。本部長がどうしても外せ

ない出張で、一日会うのが遅れてしまったんですが、磯川警部さんという方が私たちの相手をしてくれまして。この時、事件記録を見させてもらいなながらかなり詳しい話を聞かせていただきました。」

三年前の昭和二十一年十月、この島では未曾有の連続殺人が発生し、被害者である本鬼頭家の三姉妹の死体は、それぞれ俳句に見立てられていたという。その難事件を解き明かしたのは警察ではなく、本鬼頭家長男・鬼頭千万太（ちまた）の戦友だったという私立探偵……

「実はね……今、島に来ているんですよ」

儀兵衛さんの言葉を一瞬理解しかねた私だが、由利先生はすぐさま、

「という……あの金田一耕助氏が獄門島に？」

「はい」と儀兵衛さん。

「ええっ？金田一先生が獄門島に？うわあ、すごいや！」

素っ頓狂な声を挙げたのは御子柴君である。夜光怪人との闘いでは、大人顔負けの活躍を見せた彼だが、そこはまだ中学生の子供である。有名な探偵の名前を聞いて興奮する気持ちはよくわかる。

「実は僕、今度の事件で由利先生に出馬をお願いして何度も断られた時、金田一先生にお願いしようか

とも考えてたんです。知り合いの山村さんという今年デビューした新人の探偵作家さん、といつてもまだその一作しか書いてなんですけど、なんか伝手があったらしくて。」

と、どこか申し訳なきように告白した。

この時一瞬脳内に、私が金田一耕助と一緒に、夜光怪人と闘っている映像が浮かんだのはどうしてだろう？やはり相当疲れがたまっているのだろうか？そうだ、きつとそうに違いない。それはさておき……

金田一耕助。今や日本一の呼び声高い名探偵である。戦争前、日本一の名探偵といえは由利先生のことを指したが（明智小五郎こそ日本一の名探偵と呼ぶ者も確かに少なくないが、彼の活躍は昭和初期に集中しており、昭和10年前後にも奇怪な三重渦状紋事件（『悪魔の紋章』）、地獄の道化師事件、怪人二十面相絡みの事件を解決しているものの、この時期に扱った事件では質量共に、明らかに由利先生の方が上回っている）、戦後になってからの由利先生は突然引退を宣言し、麴町の家の管理を人に任せ（私も一時期、その二階の部屋を借りていた）、奥さんと一緒に国立で芋作りをしており、今度の夜光怪人の件で先生の力を借りようと何度訪ねても、

「わたしみたいな老いぼれの出しやばる幕じやない。君みたいな若い人にうんと働いてもらわなければ・・・」とすげなく断られたのであった。

先生は戦後に一度だけ例外的にカルメン殺人事件（『カルメンの死』）に着手しているが、あれは先生が奥さんと出席した結婚式の披露宴会場で起きた事件だったので、成行き上関わったに過ぎない。

一方、金田一耕助の活躍は目ざましい。戦前にも私たちが『蝶々殺人事件』に関わったのと同じ昭和12年に、岡山の旧本陣で起きたひとつやなぎ家・・・いや、藤子君の苗字と同じ字でもこちらは「いちやなぎ家」だったか・・・の奇怪な密室殺人、

この作品の趣旨は、パステイシユの形式を借りた『獄門島』の真相に関する論考でもあります。従ってネタバレしまくり必至の、そこかしこで犯人の名前やトリックを連呼していますので、『獄門島』未読の方は決して読まないでください。読んでもおそらく意味不明です（笑）。オープニングの場面は『夜光怪人』のエンディングともつながっていますが、現在オリジナル版の入手は難しいので、入手しやすい山村正夫リライト版を、金田一耕助のところを由利先生に置き換えて読んでいただいた後なら、より楽しめるかと。真相にこそ触れていませんが、終幕のシーンに若干触れている個所があります。

論考の一部に、佐藤友之著『金田一耕助さん あなたの推理は間違いだらけ』の中で、イチャモンだけつけて具体的な解法が示されていないが、指摘事項にも、すべてではありませんがその内幾つかの解答を示したつもりです。

作中に記した頁数は、角川文庫版『獄門島』の頁を指します。私がテキストにしたのは、昭和52年6月の第32版なので、平成に復刻された新装版とは若干異なるかもしれません。すみません、調べていません。

また作品の都合上、原典にも明記されていない『夜光怪人』の作中年代を昭和24年の事件とさせていただきます。時期は5月末頃です。また、金田一耕助が手掛けた事件も正確な時期が明記されていないものが多く、諸説入り乱れていますが、今回は木魚庵さん提供の「金田一耕助事件簿編さん室」をベースとして使わせていただきました。

いわゆる『本陣殺人事件』をはじめ、幾つかの事件を解決している。その後彼も戦争に動員されたが、復員早々、ここ獄門島で起きた鬼頭家三姉妹連続殺人を皮切りに、カフェ「黒猫」を巡る腐乱死体事件（『黒猫亭事件』）、天銀堂の大量殺人に端を発した椿子爵家の連続殺人（『悪魔が来りて笛を吹く』）、古神家の首切り殺人（『夜歩く』）、落武者の祟りと怖れられた連続殺人（『八つ墓村』）等々が有名で、他にも旅先などで偶然関わりを持ち、行きずりに解決していった知られざる事件も少なくないという。実に華々しい活躍が喧伝されているが、私は事件記者であるにも関わらず一度も彼と会ったことが

無い。それというのも、彼は戦前こそアメリカからの帰国早々に解決した某大事件や本陣殺人事件において、その名を新聞紙面で大いに轟かせたものが、戦後になってからはその活躍ぶりに反し、ほとんど表舞台に立つことが無く、事件解決の功績も警察の手柄として譲っているらしい。従って、事件が解決した後はじめて、警察及び関係者の口から彼が関わっていたことが判り、慌てた一流新聞から獵奇ネタのカストリ雑誌に到る記者連中が談話を取ろうと動き始めても時すでに遅く、彼は放浪の旅に出ているか、別の地で新たな事件に取り組んでいる。

彼は一時期、銀座近くの三角ビルで事務所を開いていたが、いつの間にかそこも引き払ってしまった。おそらくマスコミや、彼の名を利用しての大儲けを企む良からぬ連中などが入れ代わり立ち代わり押しかけて来るのに辟易したのだろうと私は考えている。その後彼は学生時代の友人である土建屋の風間俊六氏が、二号だか三号だかに任せている大森の割烹旅館に居候していると聞く。その女将は客商売だけあってなかなか人を見る目があるように、金田一耕助への正当な依頼人しか彼の部屋に通さないらしい。

そんなことをつらつら考えているところに儀兵

衛さんが、

「もう、島に着きますよつて、降りる準備を」と声をかける。すると由利先生が、

「鬼頭さん、申し訳ないのだが、船を着ける前によつと回ってもらいたい場所が・・・」

「ほう？どちらへ？」

「天狗の鼻と、そのちよつと下にある坂が見える場所を、海から一度見てみたいのですが」

「天狗の鼻と、その下の坂・・・ああ、仙公の奴が歩く吊り鐘を見たつちゅうトコですな？お安いご用です。」

儀兵衛さんの指示で、操縦していた漁師が船をそこに向ける。

先生はそれぞれの場所を暫くの間ジツと見上げ、何か得心がいったかのように大きく一つ頷くと、

「ありがとうございます。では島まで案内してください。」

二

一度分鬼頭家に落ち着いた私たちは、いよいよ金田一耕助その人に会いに行こうとする。すると由利

先生が妙に真剣な表情で、

「いきなり大勢で押しかけるのもなんだから、今日は私と三津木君だけで訪ねてみようかと思う。御子柴君と藤子さんにはチト申し訳ないが・・・」

一瞬残念そうな表情を浮かべた二人だが、先生の様子に何かを感じ取ったか、わかりましたと素直に応じる。

「なに、時間は充分ある。また明日にでも三津木君に連れて行ってもらおうといい。先方にはそのようにお願いしておくよ。」

分鬼頭家を出た由利先生と私が坂を登っていると、案内役の儀兵衛さんが、

「ここがさつき下から見た天狗の鼻ですわい。」

と教えてくれる。更に道を進むと儀兵衛さんはつづら折れの道の方に足を向ける。

「たしかこの先は、千光寺では？すると金田一さんは本鬼頭の方ではなくこちらに？」と由利先生。

「はい、千万太と一（ひとし）が死んで本家が女所帯になったつちゆうこともあるんですが、今ゴタゴタしとりましてな。実は座敷牢にいた与三松なんです、頭の中に腫瘍が出来たとかで、今の医学では手の施しようもないと・・・今は笠岡に入院中で、持ってあと数日らしく、姪の早苗さんが泊まり込ん

で看護しとるんですわ。そんなワケで今本家の方には、女中のようなことやっとなるお勝しかおらんのでな。」

「そうでしたか、与三松さんが・・・」

そんな話をしているうちに、境内に登りついた私たちは正面の梅の古木に目をやる。この樹に鬼頭家の三女がぶら下がっていたんだ・・・

するとそこへまだ若い僧侶が現れ、

「儀兵衛さん、いらっしやいませ。そちらの方たちは？」

「竜神島まで凶賊を捕まえに来られた東京のエイ探偵さんじゃ。金田一さんに会わせようと思っとな。今おるかな？」

「はい、おられます。そうですか、金田一さんご同業の方でしたか。では、こちらに。」

この人が沢さんか。先代の了然和尚があんなことになって、さぞや苦労されたことだろう。この若さで決して小さくはないこの寺を任されているのだからたいしたものだ。廊下を先頭に立って進んでいた沢さんは、ある一室の障子を開けて、中に声をかける。

「失礼します、金田一さん。儀兵衛さんが東京からのお客様をお連れしたので、こちらにご案内しまし

た。」すると中から、

「ええっ？東京からですって？い、いったいどなたなんだろう？」の声の後に、何かをかきむしる様な音が聞こえる。すると儀兵衛さんが先頭になって私たちを中に招き入れ、

「金田一さんはこちらの方と会うのは初めてででしたかな。」と由利先生をさし示す。

この男が金田一耕助か・・・なにやら呆気にとられていたようだが、ハツとした表情を浮かべるや猛然ともじやもじやの蓬髪をかき回し始め、

「あ、あなたは由利麟太郎先生！い、いったいどうしてこの島に？」

すかさず儀兵衛さんが、今回の顛末を手短かに説明する。

「そ、そうだったんですか。清水巡査から近々大捕物があるようなことは聞いてはいたんで、てっきり海賊のオリオン組一味を捕まえる話だと思っていたんですが、まさかあの夜光怪人が絡んでいたとは！しかも由利先生が出馬されているとはビックリです。警視庁の等々力警部から先生のご活躍はいろいろ承ってます。しかし先生、等々力さんからは先生は既に引退されたと聞いていたんですが？」

「はは、まあいろいろありましてね・・・。」と先

生も手短かに話をまとめる。

「ところで金田一さんはなぜこちらに？」

「千万太君と三姉妹の墓参りです。去年盛大な三回忌法要が行われたそうで、実は僕も御呼ばれしていたんですが、その時期はちょうど八つ墓村の事件に引つかかってまして。その後もいろいろな案件が重なって、一年遅れでようやくこちらに来ることができたんです。」

「忌違いじゃが仕方がない」と由利先生。

「はっ？」

「正確には、忌が違うとるが仕方がない、でしたかな？」

暫く口あんぐり状態の男はいきなり笑い転げ、

「あっはっは・・・磯川さん、そんなことまで喋ったんですか。ああ、可笑しい。」

和やかな雰囲気の中、儀兵衛さんが今回働いてくれた漁師たちを慰労する手配をしなければならぬいからと退席し、了沢さんがお茶を出して引き下がる、部屋の中には私たち三人だけとなる。すると表情を引き締めた由利先生が、

「まるで外国の探偵小説も顔負けの珍しい事件だったんですね。途中、海賊男の闖入というハプニングこそあったものの、了然和尚、荒木村長、医者

の村瀬幸庵の三人がそれぞれ一人ずつ姉妹を手にかけた。しかも三人は鬼頭嘉右衛門氏の遺志を受け継いでいたとはいえ、決して共犯関係を結ぶことなく、それぞれが独立した殺人事件だったなんて前代未聞ですな。そんな難しい事件をよく解決されたものだと感心しとります。」

照れくさそうに人懐っこい顔で、頭を掻く金田一耕助。

「あなたと磯川さんが和尚と対決されたのはこの部屋ですか？」

黙って頷く金田一耕助。

「その時あなたは和尚に対し、『ひとつひとつの殺人の場合、犯人は絶対にひとでを借りずに、独力でことを行っている(316頁)』と言ったのだとか？横で聞いてた磯川さんは、心の底から驚いたと言っていましたよ。」

「はい、だいたいそのようなことを言ったと思いませんが・・・」

「果たして本当にそうだったのですかな？」

金田一耕助の人懐っこい顔が引き締まり、二人の間に沈黙が落ちる。

重い空気に耐えかねた私は、思わず由利先生に詰め寄り、

「せ、先生、今のはどういう意味が・・・まさか犯人が他にいるとでも？それとも犯人たちはやはり共犯関係にあったとか？」

「慌てなさんな、三津木君。私も金田一さんの推理通り、花子殺しは和尚、雪枝殺しは村長、月代殺しは幸庵の仕業で、三人同士が助け合うことなく、それぞれの役割を果たしていたのは間違いないと思う。だがね、それぞれの事件をつぶさに見た時、彼らが凝らしたトリックを成立させるには、単独ではちよつと無理があるんじゃないかと思つたのでね。」

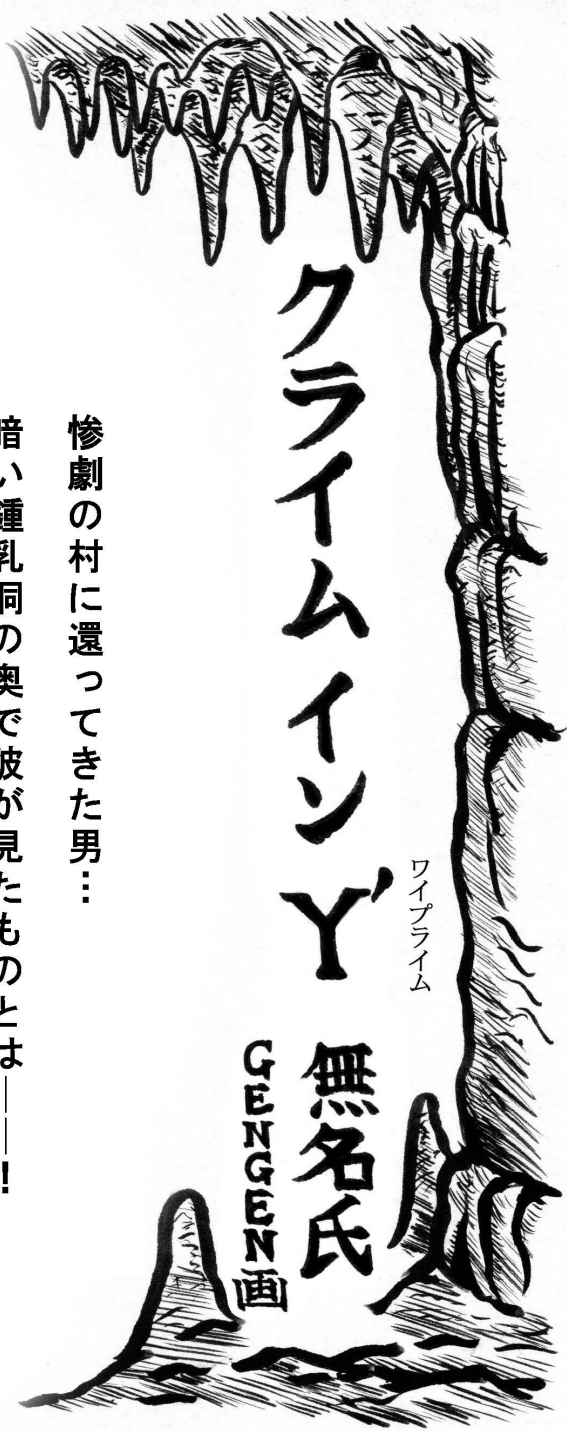
「すると、殺人には直接関与しないまでも、なんらかの手助けをした者がいると？」

「うむ。どうかな、金田一さん？」

目の前の男は、動揺したり怒ったりすることもなく、静かな眼差しで先生を見つめ返す。また暫く沈黙が降りた後、再び人懐っこい表情に戻った金田一耕助は、

「やはり、由利先生は日本一の名探偵だ。事件の資料と磯川さんの話だけで、真相を見破ってしまったものなんて。」

今、この男は由利先生の言葉を認めたのか？どうやら私だけが置いてけぼりを喰っているようだ。三人の殺人者の犯行に関与した人物とは一体・・・？



ワイプライム

クライムイン・Y 無名氏

GENGEN画

惨劇の村に還ってきた男：

暗い鍾乳洞の奥で彼が見たものとは——！

道行

一度は追われるように出た村である。その村に人目を忍んで帰って来た。長居はできない。村人は、私の存在が大量殺人の引金になったと考えている。それに、殺戮者は未だ捕まっていないのだ。どこで出くわすやもしれ

ぬ。殺戮者になぶられ、いたぶられ続けたあの人は、村を出てそのままだと噂に聞いた。だが私は、彼女はまだ村のどこかに隠れているのではないかと思った。あの鍾乳洞に行けば会えるのではないかと、彼女がこの村にいたくとも、その痕跡を見つけることができれば、とも思った。どこかに彼女の残り香で

もあるのではないか、そんな馬鹿なことも考
えた。

今日、私は懇意にしていた隣村の和尚を頼
り、日中は寺に身を隠し、夜陰に乗じて村の
鍾乳洞へと向かった。護身用に牛刀を携行し
た。草が生い茂った村の小道は、虫の鳴声が
騒々しいほどであった。空には赤みを帯びた
月が光っていた。村で三十二人が殺されると
いう惨劇が起こったのは、大正十×年四月の
ことであつた。あれから半年が過ぎていた。

面影双紙

懐中電灯の灯を頼りに、夜遅くまで鍾乳洞
の中を歩き続けたが、収穫はなかつた。深夜
「竜の顎」で仮眠をとつた。あらかじめ厚着
をして来たとはいえ、寒さが身体にこたえた。
この地での思い出だけが五体を癒した。

へさるにつけても思い出され候は、竜のあぎ
とのほとりにて、はじめてあつきおん情を賜
わりしころのこと

もう何年も前のことのような気がした。あ

の頃は、何もかもが輝いて見えた。私たちは
その後の運命の急転を、予想だにしなかつた。
へしかし、果報つたなきこの身には、そも一
瞬の幸福にて候いし

しばしの休息。さあ、のんびりしてはいら
れない。睡眠不足と寒さで頭にしびれを感じ
ながら、私は立ち上がった。そして、鍾乳洞
の中の場所を一つ一つ訪ねて行つた。二人で
過ごした場所を。二人で語り合つた場所を。
あの人を捜し、過去を捜し、私は彷徨つた。
へひとも怖るる烏羽玉の、岩のしとねもつる
が身には極楽浄土

「鬼火の淵」から分かれる、枝洞窟の一つ
に足を踏み入れた時であつた。しんとして冷
気を吐き出す暗闇。その中に白くうごめくも
のがあつた。裸の若い男女。男と女が岩床の
上で、裸の身体を重ね合わせていた。汗ばみ、
もつれ合う肢体。頬を紅潮させた女。男は—
—男は私だつた。ならば、女は—女はあの
人なのか？ 胸の鼓動が高鳴り、熱いものが
こみあげてきた。目の前の二人の情熱が、歓
喜が、吐息が、私に乗り移つたかのように。
私たちだ、あの時の、あの時の私たち。から

花の中の女



祿 白沙
挿絵：ポン酢

花、花、花、……

一

「やつ、これは……」

現場に足を踏み入れた途端、金田一耕助は呆然として立ちつくしてしまった。今まで数々の事件を解決してきた金田一耕助にとっても、今回の現場は異様なものだった。確認するように等々力警部のほうを見ると、等々力警部も頷いたきりで、これ以上何も言うつもりはないらしい。

そこは花畑であった。床には一面、赤や黄色、白の花が咲き乱れ、壁にも二、三、かわいらしい鉢が、紫の花が枝垂れている。二つある窓際の一つにはプランターが置かれ、部屋中は甘い香りに包まれている。その中央に、一人の女が横たわっている。白い服を着た女で、おとぎ話に出てくる異国の姫のように、美しい花々の中に眠っていた。

否、それは眠っているというよりは、置いてあると言った方が正しいかもしれない。それに、金田一

耕助が戦慄したのは、この鮮やかな花畑に、ではなかったのだ。

首が無い。

その死体には首が無かったのである。首のあるべきところは空白で、花に埋め尽くされていた。金田一耕助はさまざま首なし死体を見てきたが、いつもでもその感想は変わらない。人間というのは完全であるからバランスがよく見えるようで、やはり首を失った死体は不恰好に見えるのだ。首の先には白い突起物が見え、グロテスクさに華を添えていた。

「これ、発見時のままなんですかね？」

金田一耕助が尋ねると、等々力警部は首を縦に振った。金田一耕助の視線は再び死体に注がれた。その死体の胸元には、一輪の青い薔薇が置かれている。

「青い薔薇……」

等々力警部もその薔薇が気になっているようで、金田一耕助の横に立つと、首を伸ばして、フムと唸った。

「その花はなんでしょうな、青い薔薇など見たことないが……」

「青インクを吸わせたんでしょう。しかし、わざわざこんなものを用意するとはね……、犯人も手の込んだことをしますね」

「と、おっしゃるのは……?」

「花言葉ですよ、ほら、あるじゃないですか、百合の花言葉は『純潔』といったぐあいに。確か、青い薔薇の花言葉は『不可能』なんですよ」

「じゃ、これは犯人からのメッセージなんですかね?」

金田一耕助は等々力警部の言葉に、いかにも嬉しそうに白い歯を出して笑った。

「おそらくそうでしょう。わざわざ死体の上にこんなものをおいて行くくらいですから」

「確かに、これだけの花を見ていると、犯人は花に詳しいかもしれないですね。普通の人がこんなに花を買っていったら怪しまれるでしょう。ひよつとすると花屋の関係者かもしれない」

金田一耕助は一歩さがると、もう一度部屋の中を見回した。これだけの花があるあたり、この部屋の住人自身も花が好きだったのだろうか。足下の花は見たところで、アネモネ、ダリア、スイートピー、ユーストマ、フリージア、カーネーション、バラ、フヨウ、マリーゴールド、ヒヤシンス、アヤメ、それと金田一耕助に名前のわからないものが十種類ほど。死体の下にも花があるかもしれない。かろうじて茎葉の隙間に見えるこの部屋の絨毯は赤く、そ

れすらも名の知らない小さな花のように錯覚してしまう。

「被害者の身元は」

「ああ、そうそう」

等々力警部は手帳を取り出すと、軽く咳払いをしてから読み上げた。

「被害者はこの家に住む三条晴世、二十七歳、劇団員だそうです」

「劇団員? 浅草のレヴューですか?」

「いや、初台のほうらしい。名前は夕風歌劇団というそうです。事件の発見者も劇団の者でね、いま人をやっているところです」

なるほど、確かに首を失い、バランスを崩しているものの、首の方にさえ目を向けなければ、そこに横たわっているのは均整のとれた美しい女性の姿である。これでは、相当人気のある役者だったに違いない。

「死亡推定時刻は?」

「さすがにこの季節だから、正確な時間を断定するのは難しいですが……、昨日の午前中であることは確かのようにです」

「最後に被害者をみたのは?」

「それも劇団の者だそうです」

「そういつて等々力警部は死体の方を見やりながら、

「しかし、そもそもこの死体が本当に三条晴世なのかもわかりませんからね。それはあてにならないかもしれない。金田一先生、これはほら、首のない死体というトリックじゃありませんかね」

と、等々力警部は喉のおくで笑うように言った。金田一耕助は以前、友人であり、彼の探偵談の記録者でもあるY先生が推理小説のトリックについて語っていたのを思い出した。

そのY先生が論ずるところでは、推理小説には大きく分けて三つのトリックがあるらしい。一つは密室。扉や窓、人の出入りできるサイズの口、すべてに鍵のかかった部屋。その中で死体が見つかるというものだ。これは主に、被害者の自殺を装う場合や、不可解な、幽霊などの仕業という状況を作るために用いられる。

二つ目は一人二役型。これは、犯人Aが被害者Bを殺した後に、その被害者Bの役を自らすることによって、被害者Bがまだ生きていると関係者に錯覚させるものである。また、全く事件に関係のない人間Cに自分Aの役を演じさせ、犯行時間帯に自分のアリバイを作るというのもこれの亜種であろう。

そして三つ目が首のない死体である。首がない死体、もしくは顔が火や劇薬などで焼けてしまった死体はその身元の判別が困難である。これを逆手にとって、AがBを殺し、Bと衣服を交換した後、そのBの顔を損壊すれば、誰かが「その死体は衣服からAである」と判断してくれる。すなわち実際死んだのはBであるのに、Aはこの世のものでないと扱われる。このとき、連続殺人であれば、以降Aはアリバイに関係なく行動することが可能になるのだ。

しかし、この首のない死体のトリックは、首のない死体Ⅱ犯人という構図が存在してしまふ。そこで奸智に長けた犯人は、過去、あの手この手でこの問題を克服してきたのだ。

いま目の前にある首無き姫君は、まさに典型的な首のない死体である。

「ところで、死因は？」

「胴体には外傷がないから何とも言えませんな。保科先生に見てもらったんですが、早く首を見つけて怒ってましたよ」

等々力警部は苦笑しながら、三度その視線を死体に注いだ。

「これが仮に三条晴世だったとして、親族は？」
「それが、居ないみたいです。調べてみたら母子家

庭で、母親は去年亡くなっている。父親が誰なのかは今調べているところですがね、これもどうなるか」「すると、その劇団というのが最も三条晴世につながりを持った人々ということですね。とにかく彼らから話を聞くべきでしょう」

金田一耕助はそう言いながら、現場の一室を後にした。折しも他の劇団員が初台から到着したようので、パトカーがけたたましいサイレンを鳴らしながら止まる音が聞こえた。

一一

客間にはアップライトピアノが、壁にはギターが下がっている。先ほどまでの花畑とはうって変わって、ここには植物に一つもなかった。これは後でわかったことだが、この家は劇団の集会所にもなっていて、頻繁に劇団員が入り出すのだという。そういう場所だから趣味——歌劇も趣味と言えば趣味だがそれを除いた三条晴世の趣味といえる花々——は排除されているのかもしれない。台所はキレイに片付いているが、そのほかは雑然としている。棚にしまいきれない食器は机に置かれ、ホウキやチリ

トリ、バケツが積み重なって床に転がっていた。

「警部さん。それで劇団というのは？」

「劇団と言っても小さなものなんです。メインになる五人の役者を除いては他から借りてくるそう。晴世はその五人のうちでもトップの女優だった。この家に入入りできるのもその五人だけだそうです」

「経営も五人がやっているんですか？」

「小さな劇団ですからね。運営から台本、演技指導まで自分たちでやっていたらしい。そんな程度だから、自分たちで劇場を持っているわけでもない。ここを根城にしていたそうです。それで三条晴世を除いた四人ですが、まず、劇団の団長で作曲担当の高井平介、彼は三条晴世と交際していたらしい」

交際。世間の劇団の内情というのに金田一耕助は疎い。そこに何か感情のもつれがあったのかもしれない。しかし金田一耕助は首を振ってその想像をふるい落とした。容疑者に会う前に、容疑者のイメージを決めていくのは誤った推理のもとになってしまう。

「企画の山田忠夫、台本の津野佑香、それに振付の大平真実。この四人と三条晴世がこの家に入入りしてきたようです。大平真実は三条晴世と高校時代から

の友人。残りは大正時代からの仲間だそうですね」

「それで、第一発見者は？」

「振付の大平真実です。どうでしょうか、誰から話を聞きますか？」

「そうですねえ、企画の山田忠夫からにしましょうか」

三

まず初めに呼ばれて出てきた山田忠夫は、黒縁の分厚いめがねの奥で目玉をきよろきよろ動かし、そこにいる警部と金田一耕助の様子をうかがっているように見えた。着ている服は濃い紺のシャツで、ひよろりと細長い身体を持つ以外にこれと言って特筆することも無い。

「や、やつぱり、あ、あれは、さ、三条なんですよね」

すすめられたソファに座るなり山田はどもりながらようやくそれだけの言葉を口にした。

「おそらくそうですね」

等々力警部がそう答えると、山田は絶望したようにうめいて頭を抱えた。

「い、いや、わかっています。あなた方が聞きたいのは、僕らと三条の関係でしょう。だとすると、私は真つ先に疑われてもおかしくない……」

突然堰を切ったように言い切ると、山田は放心したように腕をダランと垂らして天井を仰ぎみた。

「疑われるようなことがあるんですか？」

金田一耕助が尋ねると山田はむくりと首を据えなおして語り始めた。

「三条はね、僕にとつて、おとぎ話のお姫様だったんですよ。僕はそれに惚れ込んでしまった。ぞつことに。そう、好きだったんです。でも、でも、お姫様は結局僕を選んでくれなかった。別の王子様を選んでしまった……」

「というのはつまり、団長の高井さんのことですか？」

警部の言葉に山田は首を大きく縦に振った。

「そうですね、そうですね。スターにや僕なんかじゃ敵いませんや。所詮地味な企画担当、演じたって三枚目ですからね」

山田はそう言っアハハと笑うと一つ大きく溜息をついた。

「三条さんと知り合った。いや、この劇団に入ったのはどういう経緯ですか」

さ
る
す
べ
り
ま
れ
び
と

百日紅の客人

む
し
ま
六島 京 むらた

文月ゆた画



照りつける容赦のない日差しに、このまま自分が
揮発してしまおうのではないかと恐怖した。しかし、

せいで一瞬だけ眼前が真っ白になったもの
の、すぐに見慣れた風景に戻った。
空は雲一つなく太陽は金色に輝いて、直視したら
目が潰れるだろう。クマゼミのガシヤガシヤとした

心のどこかで「それでもいいや」と投
げやりの思いも燻くすぶっている。眩暈めまいの

ゆた

鳴き声が僕の不安を更に煽る。暑さのせいも相まって鼓動が更に早くなり、鼻の頭と脇に汗が吹き出した。このままだと熱中症になりそうだ。

「琴島センセイ、大丈夫ですか？ 顔色が蒼いですよ」

出し抜けに声を掛けられ、おのずと背筋が伸びた。大丈夫です、と返答したつもりだったが、口内がカラカラに乾いて声が届かなかった。

岡山県は倉敷市の中心部に位置する倉敷医科大学。その法医学教室に僕は所属している。今年の春に大学院の学位を修めたばかりで、まだ新米の法医学者だ。検屍や解剖を僕一人で受け持つことになった。たまでは良かったものの、何の手ごたえも掴めないまま数ヶ月が過ぎ、未だに暗澹たる気分が続いている。希望に満ち溢れていた早春が懐かしい。僕は何度目かの溜息をついた。

「この暑さです。早うせんと、仏さんが腐りますよ」

岡山県警察本部の斧淵検視官が腕組みをしながら僕を急かした。銀縁メガネの奥で鋭く光る眼が怖い。僕は肌を粟立てながら静かに頷いた。

本日早朝、斧淵より検屍依頼の連絡が入った。五十代の男性が自宅で亡くなっているのを妻が発見したという。妻が一一九番通報し救急隊が到着したものの、既に心肺停止の状態だったので病院には不搬送。詳細な既往歴が不明のため、救急隊が警察へ届け出たということだ。現場は倉敷市真備町。大学より車で三十分程の場所だ。真備町を管轄区域とする玉島署の捜査員三名、岡山県警察本部より斧淵検視官と検視官付の二名、そして僕が現場に臨場することとなった。

——早く帰りたい。
正直言うと、解剖よりも検屍が大の苦手だ。解剖

は一糸纏まとわぬ遺体が解剖台に乗っているだけだからまだ良い。一方の検屍は現場の雰囲気が生々しすぎて、ついつい感情移入してしまう。亡くなるまでの生き様が容易に想像できてしまうので冷静にならないのだ。

だから今日もこうして、遺体発見現場である菊川家の中に入らずに門前に立ち尽くしている。玉島署の捜査員たちがこちらを見てひそひそと会話を始めた。僕を臆病者と嘲笑あざわらっているのは明白だ。岡山あだなの警察官の間で僕が「ボクちゃん先生」と紳名あだなされているのをとうの昔に知っている。自分に呆れて怒る気にもなれない。

「センセイ、現場はこちらです」
斧淵の「センセイ」が取ってつけたように聞こえた。きつとこの人も僕のことをバカにしているのだろうな、と考えると更に気が滅入る。彼の背中を見送っても尚、玄関に入れずにいた。

菊川家は木造一部二階建ての、どこにでもありそうなごく普通の住宅だ。小さな庭では百日紅さるすべりが満開を迎えている。現実逃避をして、しばしその鮮やかな紅色に見入ってしまった。

「何か事件ですか？」

「うわっ！」

背後からいきなり声を掛けられたものだから、驚いて大声を上げてしまった。振り返ると、そこには一人の男が立っていた。男は人懐こい笑顔を浮かべながら、

「白衣を着ていらっしやるということは、警察医の方ですか？」

と、訊いてきた。法医学者だと答えると、男は何か目を輝かせる。

「なるほど、そうですか。法医学の先生でいらっしやる。そうですか、そうですか」

何度も頷いて僕を舐め回すように見つめる。

——何だ、コイツ。

自分だけじろじろ見られるのは悔しいので、お返

しに僕も男を觀察してやった。男は中肉中背、年齢は不詳。不思議なことに彼は二十代にも見えるし、五十代と言われればそうとも取れるのである。年齢推定ができないなんて法医学者失格だ。髷が短めつばの涼しげな麦わら帽子をかぶり、髪髪の量が多いのか、もじやもじやの黒髪が帽子からはみ出していた。これまた涼しげな白い開襟シャツにジーンズ、そして若葉色のスニーカーを履いている。更に、彼の足元には使い古したトランクが置かれていた。

——旅行者？　もしかしたら新聞記者か?!　早速嗅ぎつけて来たんだらうか。

男は僕の睨にらみつけるような視線に気づいて、

「いやあ、平成へと元号が変わってから便利な世の中になりましたねえ。洋服が安く購入できるんですから。しかも丈夫で着心地もいい。袴や下駄だと走る時に不便で。僕が愛用していた帽子はさすがにもう売ってないのかな」

「袴？　下駄？」

男は僕の問いをさりげなく聞き流し、「さて、琴島先生。検視官がお待ちですよ。現場は二階の寢室ですね」

僕の肩を叩き、勝手に菊川家へ上がり込んでしまった。僕は慌てて男を追いかける。

「ちよ、ちよっと、アンタ！　関係者以外は立ち入り禁止で——」

男の影を追い、薄暗く急な階段を昇った突き当たりのドアを思い切り開けると、屈強で強面こわもての男たちがこちらを睨む。玉島署の捜査員たちと斧淵検視官だ。人口密度が高いせいで、八畳ほどの洋室はエアコンが効かず熱気が充満している。

「琴島センセイ、何を独りで喋喋つとるんですか。仏さんはこちらですよ。早う検屍を始めてください」斧淵は中指でメガネを押し上げた。彼のこめかみに青筋が浮かんでいるのに気づき、僕の背筋に戦慄が走る。遺体を確認する前に、室内をさり気なく見渡す。先ほどの男の姿は無かった。

「こちらに誰か来ませんでしたか？」

百日紅の客人

六島京

(@gokumonislund)

都内某法医学教室にて解剖技官を卒業としています。小学生の頃に出会った「獄門島」が私をミステリの世界に誘い、法医学の道へと連れ出してくれました。パスティッシュ集に参加させていただき、たいへん光栄です。私以上に横溝作品を愛し、かつ造詣が深い方々に出会えたことはこの上ない喜びとなりました。

文月ゆた (@fumiduki)

あの人は幻だったのでしょうか…と独り言つ。曖昧な狭間での出会いに主人公を羨ましく思いながら描いておりました。心惹かれる物語の挿絵を、描くはありますが描かせていただきありがとうございます。そして色々と勉強になりました。楽しくておそらくにやにやしながら作業していたのは内緒です。

<コラム>

おかじゃき (@kana_violetann)

<編集>

木魚庵 (@mokugyo_note)
水浅葱雷 (@rai_mizuasagi)

<校正>

部の商売人 (@syoubaininn)
砂時計 (@y_m_sunadokei)
美奈 (@mina_egg)
おなにすと (@onaniest)
えかて (@E3_komachi_E6)
ステラ (@choco3chip)

<表紙モデル>

遠藤里那 (@h_aria1124)

<表紙撮影>

内田名人 (@tuyama_30)

<タイトルロゴ>

おさむし (@osm4)

クライム イン Y

無名氏 (@emanon_tw)

気取ったタイトルですが、ようはダッシュ村です。意味違うけど。TK10も出ません。あのヒロインにあのシーン、ディープなファンの方もそうでない方も、本家小説や映画のプロモーション風味の小品として、ちょいと楽しんでいただけたら幸いです。

gengen (@gm_gengen)

神保町横溝倶楽部同人誌に参加できましたこと大変光栄に思います。しかしながらわたくしの拙作がはたして無名氏様の作品イメージにあったものになっているのか不安を感じております。もし無名氏様をはじめ皆様に喜んでいただけているようでしたら、調子に乗ってこれからも参加しちゃうんだから！

花の中の女

祿白沙 (@bk100_2051)

横溝がやりそうでやらなかったトリック……と思っていただけで幸いです。女シリーズのパスティッシュってなかなか無いんですね、色々できそうなのに。あ、そうそう、今回のトリックは現代でも通用します。現代版「花の中の女」こと拙作、「薔薇と首」もよろしくお願いします。

ボン酢 (@pnz0225)

挿絵を寄稿させていただきました、ボン酢と申します。素敵なパスティッシュの演出を少しでもお手伝いできるよう、拙いながらも一生懸命描きました。自分では絵しか描かないので、文章での金田一作品二次創作に関わることができて大変光栄です。また機会がありましたら、是非参加させて下さいませ。

作品名

ペンネーム

(ツイッターアカウント名)
著者と絵師のコメント

悪魔の人形師

築地つぐみ

(@kamigatadays)

金田一さん対怪人二十面相を書くぞ、と息巻いていたら、だらだらと長くなりすぎて、結果、二十面相が姿を現す前に終わってしまいました…。続きを書く機会があったらいいなー(と木魚庵さんの様子を伺う)。中途半端なシロモノですが、ご感想をいただけたら幸いです。

鐘宮ヤマト (@akesabu)

挿絵は初の試みで、色々苦戦することもありましたが楽しくできました。もし次回があればもっと面白い絵の挿れ方もしてみたいです。今回はお声をかけていただき本当にありがとうございました。

告 解

みかん畑 (@baiko14)

大昔のシロモノですみません、みかん畑と申します。最近新刊出させてませんが、金田一耕助本とが出してる耕ちゃんアイドル派です。よろしくお願いします。

吊り鐘はなぜ歩く

tokyo-zodiac

(@machodolagon)

『甲冑殺人事件』の真実」に続く2作目のパスティッシュです。神津恭介に次いで、今回はありそうでなかった金田一耕助 × 由利麟太郎に挑戦してみました。獄門島事件の知られざる真相を書くだけのつもりが段々と興が乗りはじめて、金田一さんの空白期間まで話に絡り込むなど、けっこう調子に乗ってます(汗)

深海コヨーテ

(@deepseacooyote)

毎号皆さんの愛情ほどばしる力作を楽しみにしていましたので、このような挿絵の形で参加出来たことを嬉しく思います。企画があればまた参加させていただきます！

横溝耕談倶楽部 金田一耕助パステイシユ集特大号

発行日：2014年12月29日初版

2015年5月4日第二版

印刷所：PICO

企画・監修：木魚庵

DTPデザイン：水浅葱雷

発行：神保町横溝倶楽部

Twitter：@Jin_Yoko_Cttee

w e b：http://www.yokomizo.to/dojin/

E-mail：mokugyo@yokomizo.to (木魚庵)

